

入江一子さん100歳 その情熱の絵筆

105歳、私の証 あるがま、行く

日野原重明

新年はいつも、愛用している「10年手帳」をめくり、これからの楽しみな予定を眺めます。何年も前から計画していたことが実現すれば、うれしさはひとしおです。たとえば昨秋も、私は日本橋の三越本店で開かれた入江一子画伯の「百寿記念 入江一子自選展」に出かけ、100歳を迎えた入江さんと105歳の私との「ギャラリートーク」を実現しました。

東京・阿佐ヶ谷には「入江一子シルクロード記念館」があります。6年ほど前、ここを訪れ、入江さんがシルクロードに寄せる情熱と、作品の力強さに圧倒されました。それをご縁に2012年1月、日本橋三越の特選画廊での「ニューヨーク個展凱旋記念」と銘打った展覧会の時、初めて入江さんとのギャラリートークに臨んだのでした。念願だったニューヨーク個展を成功裏に終えた入江さんの颯爽とした姿の前に、私も「創作意欲と年齢は関係しないこと、わが意を得た思いでした。入江さんが「あと10年は描き続けます」と仰るので、「ではその中間の5年後、入江さんが100歳の時、ぜひまた2人でギャラリートークを」と約束し、その予定がすっかり手帳に書き込まれました。



絵と題字・小田桐昭

そして5年弱の月日が流れた今回。入江さんの38点の大作が並び、彼女が60代の頃から足しげく訪ねたシルクロードの風景や花々が、独特

の鮮やかな色彩、大胆な構図で表現されています。私は絵に閉じ込められたエネルギーに、「人間は年を重ねるほど、恐れるものなく、自らが望む表現に、大胆に近づけるようになるのだ」と感じました。入江さんは、私が5年前に越えた「100歳という関所」をすべりと抜け、いまなお創作意欲に燃えています。「5年後のトークも視野に入ってきましたね」「東京五輪の聖火ランナーが募集されたら一緒に手を挙げましょう」。大いに会話が弾みました。私も時々、水彩画を描くことがあります。我が家のリビングには、私が103歳の春に描いたチューリップの水彩画が飾ってあります。花はガラスの器に挿され、光の屈曲のせいで、葉と茎が水の上と下で見え方が違ってきます。なぜかそこに強く惹かれ、一心に絵筆を取ったのでした。どんなに年を重ねようと、人間から情熱と好奇心を奪うことは出来ないのだと思えます。

(聖路加国際病院名誉院長)